ひろしま歴史回廊

第12部・近世の自然と暮らし①

城下のブタ　通信使の接待に使用

江戸時代の人々の暮らしと自然環境、動物や林野とのかかわりについて、現代の環境問題も意識しつつ、このシリーズで振り返ってみたい。

■食用に飼育されず

天明二（一七八二）年ごろのこと、広島に立ち寄った京の医師橘南谿（なんけい）は、城下町のそこかしこにブタがいるのを見て驚いた。「形、牛の小さきがごとく、肥ふくれて色黒く、毛はげてふつつかなるもの」と観察し、また、中国では食用に飼育、琉球にも多く長崎でも食用にしているが、日本では珍しいものだと記している（『東西遊記』平凡社）。

当時の日本では、野生の鳥獣類や魚介類はよく食べていたが、食べるために家畜を飼うことは表向き行われず、広島のブタも食用に飼育されていたのではなさそうだ。ではなぜいたのか、南谿も説明はしていない。

ちなみに、十二支の亥（い）は中国や韓国ではブタのことで、今年（亥年）は彼の地ではブタ年である。日本ではブタが珍しかったのでもっぱら野生のイノシシとして理解したらしい。現代中国語の「猪」もブタの意味。もちろんイノシシもブタも元は同じ動物である。

さて、広島城下のブタは、江戸時代に来日した朝鮮通信使に提供するため長崎から取り寄せ、余ったものを城下に放したことが起源のようである。すでに貞享二（一六八五）年には城下で増えすぎて「ブタ狩り」まで行い、捕らえた百三匹はあらためて広島湾沿岸の浦々・島々に放している。

■蒲刈に「奉行」設置

また、通信使来日の際には地域の鳥獣類も捕獲され、接待を行う蒲刈島三の瀬には「活畜活鳥奉行」まで設けられた。

先述のように、彼の地では日本と違って農業のなかにブタなど食用家畜飼育の文化が含まれる。その客人への苦心の接待ぶりから、逆に日本文化の特徴に気付かせてくれる一例でもある。

その後幕末までに城下のブタはいなくなったが、ブタが放された浦々・島々では、イノシシによる農作物の被害が問題となっていた。

（広島大教授・佐竹昭）

土曜日に掲載します

今年はブタ年ー。ブタをあしらった中国の年賀状（部分）